



ベストティーチャーに聴く 授業の工夫③

鹿児島大学 FD 委員会

【発行／2020年12月】

鹿児島大学医学部保健学科・同大学院保健学研究所
教授 赤崎 安昭



① はじめに一経歴・専門領域の紹介など一

私は、昭和62年、鹿児島大学病院神経科精神科に精神科医として入職し、大学院、助手（現在の助教）、講師、准教授を経て、平成25年4月1日付けで、医学部保健学科・保健学研究所の教授として着任しました。2年間、学外に出た期間を除くと、30年と少々、鹿児島大学医学部において、教育、研究、医療等に従事していることとなります。専門は、臨床精神医学および司法精神医学です。最近では、司法精神医学にウエイトを置き、殺人、放火等、重大な罪を犯した人達の精神鑑定を介して、臨床および犯罪精神病理学に関する研究に携わっています。司法精神医学は、臨

床精神医学の応用分野であるため、臨床精神医学がその基礎となっています。

私は、精神科医であり、上記のような学問を専門としているため、医学部保健学科では、精神医学、心理学、カウンセリング論等の講義、演習を担当しています。大学院生の講義も担当していますので、年間130コマ超の授業を担当しています。本稿では、大学院生の講義に関しては割愛し、私が学部学生の講義でこころがけていること、工夫をしていること等を紹介するとともに、受賞者としてのコメント・決意を記載させていただきます。

② 実在する精神障害者の診断のプロセス・治療経過を提示する

保健学科（看護学専攻、理学療法学専攻、作業療法学専攻）は、第2学年から疾病論等の専門科目の講義が本格的に始まります。私は精神科医ですので、「こころ」、「心身」を扱う領域の講義を全て担当しています。精神疾患とは似て非なる「心身症」に関する講義も担当しています。

秘密漏示罪で検挙・起訴され、罰金ないし懲役刑が課せられる可能性があります。最近の学生の中には写真を撮影してSNSで配信する方がいますが、医療従事者および医療系学生は実習などで知り得た個人（患者）情報をSNSにアップしますと、学内はもちろん、社会的にも処罰の対象となります。さらに、私は、第1回目の講義では、「精神障害者に対する偏見」がもたらした負の歴史にも触れ、精神障害者に対する「スティグマ」を払拭することが医療従事の責務でもあることを示します。

本邦では、うつ病など精神疾患の罹患者はとても多いのですが、例えば、「うつ病という病名は聞いたことがある」というレベルであり、その概要を知る学生はほとんどいません。ですから、初回の講義から精神疾患について講義をしてもチンプンカンプンで理解できるわけがありません。そこで、私は、第1回目の講義では、精神疾患を患った患者さんの治療経過や、時には「殺人」や「放火」に至った精神障害者の診断のプロセス・犯罪精神病理を分かりやすいように修正して提示しています。

第1回目の講義では、実在する症例を提示しますのでインパクトがあります。学生の皆さんにとっては「記憶に残る授業」になっていることでしょう。この時の授業では、精神症状などを詳しく説明をすると混乱するので、症例の概要を示す程度に留めます。このような講義の構成で精神医学という学問に導入して、学生の皆さんには、「これから自分達は精神医学を学んでいくのだ。精神障害者の治療・リハビリテーションに関わるのだ」という自覚を促すような工夫をしています。

症例を提示する際には、匿名化した上に論旨に支障がない範囲で改変していますので、本人が特定されることはありえないのですが、症例を提示する前に「刑法134条：守秘義務」に関することを教授します。これは医療従事者に課せられた義務です。「守秘義務」に違反した場合には、

③ 「国家試験合格率100%」を目指しつつ、全人的医療が実践できる人材の育成

大学に入学したからには、卒業して「学位」を取得することが目標となりますが、医学部医学科は「医師」、医学部保健学科は「看護師」「理学療法士」「作業療法士」、といった国家資格を取得することも大きな目標になります。資格は学科・専攻によって異なりますが、ライセンスを取得する目的で入学していることには変わりはありません。しかし、ライセンスを取得することだけに専念すると、「病（やまい）

を診て人を見ない医療人」が育ってしまいます。ですから、私だけではなく医学部の教員は全員、学生に「豊かな人間性と高い倫理観を持ち、全人的医療を実践することができる能力」を修得できる教育を実践しています。

私は、精神医学の授業で主に疾病論について講義をして、それをベースにしてカウンセリング論等の授業を行っていますので、自ずと患者さんの「気持ち」「関わり方」につ

11号

12号

13号

14号

15号

16号

17号

18号

19号

20号

ベストティーチャーに聴く授業の工夫

いても教授することになります。さらに、医学部生なら誰でも不安に思っている国家試験対策も並行して行っています。国家試験対策として私が工夫しているのは、第2学年という早い時期から、国家試験の既出問題と向き合ってもらおうことです。具体的には、国家試験の既出問題を配布して、出題された疾患や症状等を取り上げて解説をして、臨床実習に必要な知識・応用力が身に付くように臨床の最前線の内容にまで発展させていきます。さらに、第4学年から始まる臨床実習に

備えて、具体的に患者さんとの関わり方、話し方、口調、声の大きさ等についても教授します。そうすることによって、まだ見たこともない精神疾患の患者さんをイメージすることができ、患者さんの「気持ち」(心理状態)を知ろうとする姿勢、コミュニケーションを取ろうとする姿勢が芽生えることが期待できます。つまり、国家試験に合格できる水準の学力が身につくとともに、全人的医療が実践できる人材の育成につながる効率の良い講義になるような工夫をしています。

4 アクティブラーニングの要素を取り入れた授業の実践

授業は教員から学生へと「一方通行」になりがちです。しかし、「一方通行」の授業では、学生は集中力を欠き授業に飽きてしまいます。そこで、私が工夫しているのは、アクティブラーニングの要素を取り入れた授業の実践です。簡単に言いますと、疾患別にテキストや資料をもとに講義をした後に、国家試験既出問題に類似した問題を提示して、学生に「当てまくる」という手法です。この時、単に学生に問題を出して解答をさせるのではなく、「なぜ、そう思う?」「なぜ、そう考えた?」という具合にショート・ディベート形式で解答を促します。しかし、この方法には少し問題があります。「時間のロス」が発生してしまうのです。例えば「統合失調症の一次妄想を3つ挙げなさい」と質問をすると、黙り込んでしまう学生がいるのです。これでは、「沈黙」が続き時間だけが過ぎていきます。私は保健学科着任当初、このような「時間のロス」を解消するために私が解答を示していましたが、いつしか学生達は、2~4名の小グループを作り、私から指名された学生に資料や教科書を示して、私の質問に解答するための手助けをするようになったのです。このような学生達が編み出した手法に私は感心しました。なぜなら、「時間のロス」が解消されますし、また「集団で行う作業」(チームワーク)が実践できるので、チームで

の医療、言い換えますと、多職種連携のチーム医療に関わる医療従事者としての礎が形成されることにもなるからです。

このようなスタイルの授業ですと、①疾病論、②治療論、③患者さんの心理状態(気持ち)、④患者さんに寄り添える全人的医療、⑤国家試験対策、⑥コミュニケーション力の向上、⑦チームワークの形成・向上等を修得することができます。

補足ですが、学生に質問をした際の反応を「読み取る」のも授業の工夫に必要なことなのです。私は、学生が質問に答える際の内容、声の大きさ、言葉の流暢さから、理解できているのか否かを読み取ることも教員として必要なスキルだと思っています。そして、理解が不十分と思われる学生には、より平易な内容を質問して、どの部分を理解していないのかを探ります。逆に十分に理解できていると思った学生には、さらに難易度の高い質問をして応用する力を修得させます。つまり、単に解答させるのではなく、学生の反応を見て質問の仕方を工夫をするのです。時には、少々意地悪な質問もします。原因不明の疾患について、「原因は何か?」などと質問することがあります。すると、「わかりません」と述べずに、私自身が勉強になるような「仮説」を示す学生がいるのです。学生の講義は、私にとっても刺激のあるものになります。

5 学生自身が自分のメンタルヘルスに目を向ける

医学部の学生達は、座学の授業の後に、患者さんと接する臨床実習があります。その際、個人差はありますが、臨床実習の最中に心身共に疲弊する学生が稀ならずいます。その際は教員全員が総力をあげて支援して対応していますが、その予防策も必要であり、そのような事態になる前に学生自身が自分のメンタルヘルスに目が向けられるようになるスキルを修得して欲しいと私は考えています。その「予防策」に貢献しているのが、カウンセリング論を含む精神医学という学問です。

精神医学という学問を学ぶと、患者さんの治療・リハビリ

テーションのみならず自分自身の心身の状態を健全に保つスキルを身につけることもできます。ですから、私は、学生と同世代の症例を提示して、学生自身が自分の心身の状態に目が向けられるようになる工夫もしています。このような講義をしていますので、精神医学等の授業を通して、全人的医療を実践する基盤が形成されます。そして、その他の様々な専門科目を学ぶことによって、豊かな人間性と高い倫理観を持ち、全人的医療を実践することができる人材が育成されると私は信じています。

6 結びにかえて

このたびは、教員冥利に尽きる最高のご褒美をいただきました。今後も、鹿児島大学の教員として自己研鑽を図りつつ、自分自身の健康管理にも留意しながら、鹿児島大学の運営・

教育・研究、そして様々な社会活動等に全身全霊を注ぐ所存です。今後も変わらぬご指導ご鞭撻のほどよろしく申し上げます。